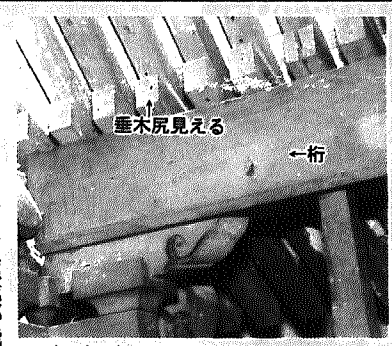
及川大工を追って

「豪雪地に生きる秘技」

第三回



（写真１）

雪なだれで知られる西頸城郡能生町柵口（ませぐち）に立つ明了寺。裏山が本堂におんぶするように迫っています。

――裏山の雪なだれで本堂が埋って傾いた。不思議だ、春がきたら元とおりに自然に戻りよった。

――（住職、門徒）間瀬大工の技の素晴しさに感嘆の声をあげる。

これは、本堂全体にしなやかさがあり、元に反復する秘技が豪雪地に生きつづけ、間瀬大工の寺や社として愛されてきました。

確かにこの寺の用材は、ケヤキを吟味し、木割も大きく、積雪を意識していることが知れます。

しかし随所に創意工夫が施されています。その技法は他の大工集団に見られない技法であり、間瀬大工のトレードマークとなっています。

その一つに屋根を支える桁の垂木の接続のしかたです。

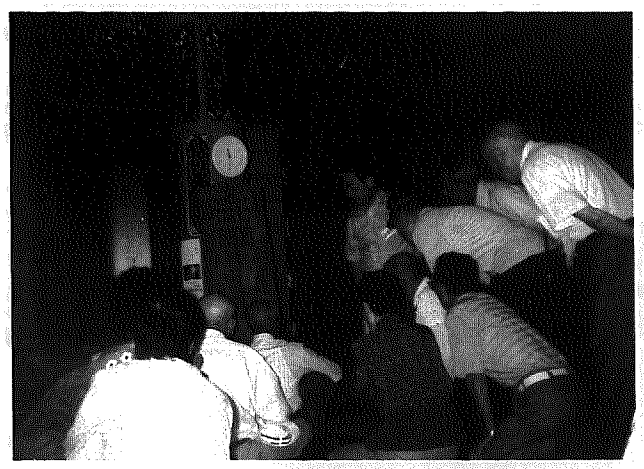
普通なら長い垂木を用い、桁のところに垂木の尻（小口）と付け足す垂木の尻と合わせ、あたかも一本の垂木とみせるが、間瀬大工は小口と小口は合わせず、付け足す小口は桁に充分に乗せ並列に継ぎます。（写真一）この方法によって局部的な傾斜力が加わっても復元します。

屋根裏の小屋梁（こやばり）や虹梁（こうりょう）には意識して弓形に曲がった木材を多用。

これらは、「間瀬峠」と呼ばれ、一般的には「登り」と称される用語です。

上からの重圧を左右両サイドの柱に分散させる。雪国では重要な技法です。

瞬発的な力に耐え、しなやかな反復力を増す。丸い卵の殻が壊れ難い原理です。


祖先の名を発見し絶句する間瀬の人々（明了寺棟札）

この明了寺は、明治十六年棟梁、篠原熊三郎（重典）俊二郎（重勝）脇工込山米蔵（重孝）によって完成しました。

門前を流れる能生川を遡（さかのぼ）れば、焼山、火打岳、その裏側は信州飯山市です。この山を越える道はなく江戸に続く北国、飯山街道を往くしかありません。

豪雪飯山線、戸狩野沢温泉駅前に真宗寺があります。

境内に佇（たたず）んだとき、日本一の豪雪地帯、湿って重い積雪に意を注いでいる感じが、外観から読みとれます。

棟札には明治十五年、篠原熊三郎、篠原俊治郎、込山米蔵の名前が読み取れます。篠原グループは能生と飯山に同時に二つの現場を持ち完成させたことになります。

篠原熊三郎は、吉田神社の棟梁、嘉左衛門（重房）の三男です。（天保十三年～明治二十二年）俊二郎は次男でしょうか、確認できません。

脇工米蔵は熊三郎の父が吉田神社にノミで刻んでいるとき、背に乳のみ児をくくりつけて遊んでいた子供が一丁前になった姿でありました。吉田村新田町生まれ。先代嘉左衛門が、この子供の才を見込んだのか、自分のグループの弟子として育てた一人でした。

間瀬以外の名が棟札に登場して来るのは、明治期に入ってからでした。明治期に入って、頑固なまでの優れた匠技を伝統する棟梁だけでなく、経営的センスを持つ棟梁が求められる時代に入ったと思われます。

明治四年、篠原家の嘉左衛門を襲名した当主は六十一才で亡くなりました。

柏木三五平に養子に出した熊三郎を棟梁に据えなければなりませんでした。

熊三郎は生家篠原家の伝統的な技を頑迷に守ることも大切にしましたが、施主の希望を取り入れるなど、経営的感覚の持ち主でもありました。

明了寺の建立には、寺が食事などを供し、日雇取りの感が強くなっています。

棟梁の監督の下で、自分の得意な分野で、自分の納得のいく仕事をする感が薄れ、定められた日数内で仕上げなければならない。そんな感じが想定できそうです。

写真に彫り物、かえる又など、部分、部分を撮りますと、みんなそれぞれ素晴らしい写真に仕上がります。しかし本堂内の総体的なバランス、納まり具合は、江戸期の仕事に比べるとき、寂しい感があることは、事実です。

明治期に入ると、篠原家を継いだ幼名儀三郎は、北海道に渡ります。そして篠原組を組織し、堂宮大工としてよりも、事業家として急成長します。しかし、名門棟梁家の伝統、血筋である、仕事に対する責任感、情熱は脈々と流れていました。明治二十五年、嘉左衛門は納期の遅れの責任感から、自らの腹を切り亡くなりました。

（願龍寺過去帳）

子供の要五郎、要次郎も篠原組を更に大きくしました。しかし、発展する北海道は匠技を大切にする経営感覚よりも、むしろ組織の運営をスムーズにする時代を求めていました。

「能登から漂着した篠原家は明治末北海道に消えた。いつか子孫を訪ねてみたい。」

（岩室村生涯学習推進本部）

■広報いわむろ　第四三四号　平成十年六月一日発行（毎月一回一日発行）■発行　岩室村役場　■編集　総務課
■新潟県西蒲原郡岩室村大字西中八六〇（〒九五三―〇一九二）■☎〇二五六―八二―四一一一（代）■印刷　北洋印刷㈱